はじめに

教育学部教育改善員会委員長　上谷順三郎

本年度の教育学部教育改善委員会の活動報告書は以下のような構成になっています。(　) 内は担当の委員です。

第１章　授業アンケート（有家雄介）
第２章　授業紹介（原田義則）
第３章　学生 FD 委員会（清水 香）
第４章　FD 講演会（髙谷哲也）
第５章　教育改善セミナー（上谷順三郎）

授業アンケートは、過去２年間に比べてリアルタイム配信授業と対面授業の割合が高くなっていますが、回答の平均スコアに大きな変化はありませんでした。また、例年のように、授業満足度と自由記述に注目し、ベストティーチャー賞選考の参考としました。受講生へのフィードバックによるコミュニケーション・ツールとしての活用の効果など、これらの分析を次年度の活動にいかしていきたいと思います。

授業紹介は、過去最高の報告件数でした。授業形態ごとに「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」「その他」の回答内容を AI テキストマイニングによる結果として報告しましたが、FD の目的が達成され、授業改善に資する取り組みとなったと評価できます。

学生 FD 委員会は、３年ぶりに学生交流イベント（学科対抗ソフトバレー大会）を開催することができました（参加人数 154 名）。また FD シンポジウムでは、学部の関係委員会委員長の先生方にご出席いただき、密度の濃い意見交換を行うことができました。例年通り、ピアサポートとして『履修登録のすすめ』の改訂版を作成するとともに、相談窓口を LINE アプリによって開設しました。

FD 講演会では、「教職志望者のキャリア形成と教員養成が果たす役割」について考える、をテーマとして、岐阜大学の長谷川哲也先生をお招きしました。長谷川先生からの各種情報をもとに、参加者のそれぞれの学科やご自身の専門分野の立場からの情報や意見が出されました。教職についてのイメージ形成の段階性を踏まえた、学生の学びの進め方についての検討が必要であることが確かめられました。

教育改善セミナーでは、昨年度に引き続き、教職大学院、教育学部、附属学校園の連携をテーマとし、令和５年度以降の学部改革についての学部長からの説明と副学部長による話題提供のもと、参加者による意見交換を行いました。三者の連携及び教育改善にとって特に重要な教育実習を中心に取り上げましたが、教育実習のカリキュラム的位置づけを含め、今後とも、お互いの取り組みについての情報共有や意見交換が必要であることが確認されました。本テーマを次年度以降も継続していきたいと思います。

以上、概略を紹介しました。具体的なデータや事例については各章をご覧ください。

目　次

１章　授業アンケート回答の分析
１　アンケート実施方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
２　実施状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
３　結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

２章　令和３年度教育学部授業紹介報告
１　授業紹介の実施計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
２　授業紹介の実施状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
３　授業紹介における記述　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
４　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

３章　教育学部学生 FD 委員会の活動
１　学生 FD 委員会の活動概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
２　活動の振り返り　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
３　今年度の成果と今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

４章　令和３年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会　・・・・・・・・・・・13

５章　令和３年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会教育改善セミナー
１　開催の趣旨　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
２　セミナーの概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

１章　授業アンケート回答の分析

１．アンケート実施方法

令和４年度前後期の授業アンケートを以下の要領で実施した。

- 実施時期：前期　令和４年７月１１日（月）　～　８月１０日（水）
  後期　令和５年１月１６日（月）　～　２月１４日（火）
- 実施科目：事前調査で各教員が開講する授業科目から１つ以上を選択。回答がなかった場合は、委員会で１科目を指定した。調査では主に用いた授業形態（(a) リアルタイム配信授業、(b) オンデマンド配信授業、(c) 講義資料・課題提示による授業、(d) 対面授業から一つ）についても回答を求めた。
- 実施手段：manaba によるオンライン回答
- 質問項目：Q1 ～ Q11 の１１項目。Q1 および Q11 以外は４件法（１．そう思う、２．だいたいそう思う、３．あまりそう思わない、４．そう思わない）による回答。

  Q1 【学習時間】この授業に関して，あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習，復習課題，掲示板を読むなど，すべてを合わせた時間で回答してください。

  Q2 【主体性】あなたはこの授業に主体的に取り組むことができましたか。

  Q3 【理解度】あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。

  Q4 【シラバス内容】この授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。

  Q5 【シラバス目標】シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。

  Q6 【説明】教員の説明は分かりやすかったですか。

  Q7 【興味関心】この授業は，あなたの興味・関心を高めるものでしたか。

  Q8 【資料】資料（板書，スライド，講義動画，配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。

  Q9 【質問】この授業は質問がしやすい雰囲気でしたか（メールや manaba 上での質問等を含む）。

  Q10 【満足度】この授業は全般的にみて満足するものでしたか。

  Q11 【自由記述】この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

前後期の平均スコアを表１に示す。

表 1　令和４年度授業アンケートの平均スコア

	前期	後期		前期	後期
Q2	1.5	1.5	Q7	1.4	1.4
Q3	1.6	1.6	Q8	1.4	1.4
Q4	1.3	1.3	Q9	1.5	1.5
Q5	1.7	1.6	Q10	1.4	1.4
Q6	1.4	1.4			

- フィードバック：担当教員によるアンケート結果についての振り返りを manaba で公開した。

２．実施状況

令和４年度の授業アンケートと教員によるフィードバックの実施状況を表２に示す。後期の授業アンケートの回答率は前期に比べて低下しているが、R3 年度よりは回答率の低下は少なくなっている。前年度より１０日ほど長めに回答期間を多く取ったことが影響していると考えられる。また、教員によるフィードバックの実施率は、昨年度と比べて若干改善しているが、さらに数字を改善するため、来年度以降より周知を徹底する必要がある。

表 2　授業アンケートとフィードバックの実施状況

	R4 後期	R4 前期	R3 後期	R3 前期
実施科目数	79	78	77	94
履修登録者数	2969	3164	3335	2663
回答者数	1349	1574	1149	1435
回答率	45%	50%	34.5%	53.9%
フィードバック数	30	29	26	31
実施率	38%	37.1%	33.8%	33%

３．結果

授業アンケートの Q1(学習時間)については、授業時間外での学習時間を１．５時間以上、２．４から５時間程度、３．３から４時間程度、４．２から３時間程度、５．１時間から２時間程度、６．１時間以下、により回答してもらった。前年度からの平均スコアの推移を表３に示す。

表３から、学習時間が若干減少していることが見てとれる。理由としては、オンライン授業が減少し、特に比較的履修登録者の少ない授業で対面授業が増加していることが考えられる。現状では、授業時間外での学習時間を十分に確保できているとは言い難い。来年度以降はかなりの授業が対面方式となることが予想され、課題の出し方などを工夫して十分な授業外学習時間を取れるような授業を行う必要があると考えられる。

表 3　Q1【学習時間】の平均スコアの推移

	R4 後期	R4 前期	R3 後期	R3 前期
Q1	4.9	4.9	4.8	4.8

その他の質問項目について、前年度と比較したものを表４に示す。前年度と比較して、全体的に 0.1 ポイント程度の数値の改善が見られ、数値が悪化した項目は無かった。特に、Q9 の質問のしやすさに関する項目は、徐々に対面授業が増加する中でも改善傾向が続いている。コロナ禍の遠隔授業で、教員に直接質問する以外の手段に学生、教員ともに慣れてきたということも理由の一つだと考えられる。今後とも、質問する手段を授業中に周知していくなどして、質問しやすい授業を行うことが、理解度や興味関心のスコアを改善していく上でも重要であろう。

表 4　Q2 ～ Q10 平均スコアの推移

	R4 後期	R4 前期	R3 後期	R3 前期
Q2	1.5	1.5	1.6	1.6
Q3	1.6	1.6	1.7	1.7
Q4	1.3	1.3	1.4	1.4
Q5	1.6	1.7	1.7	1.7
Q6	1.4	1.4	1.5	1.5
Q7	1.4	1.4	1.5	1.6
Q8	1.4	1.4	1.5	1.4
Q9	1.5	1.5	1.6	1.6
Q10	1.4	1.4	1.5	1.5

２章　令和４年度教育学部授業紹介報告

１．授業紹介の実施計画

(1) 授業紹介の目的と枠組み

「鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針」では、FD を「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す」と定義付けられている。また「教員の責務」として、担当する授業方法や運営方法等の改善を自発的に行うことが求められている。

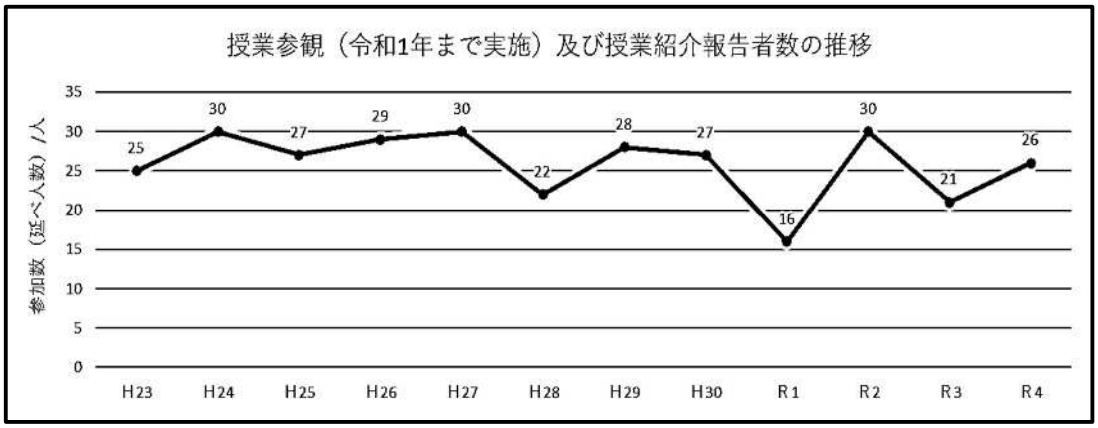
本学部の教育改善委員会では、これらの目的を実現するために、例年「教員相互による授業参観」を実施してきたが、新型コロナウイルス感染拡大により、昨年度に引き続き本年度も「授業紹介」を実施した。以下、その実施状況等について紹介する。

(2) 授業紹介の実施

教授会での周知を図った後、前期 7 月 29 日（金）～8 月 24 日（水）後期 1 月 19 日（木）～2 月 3 日（金）の期間に実施した。教育学部専任・特任教員が担当する教育学部開講の授業科目から、各教員が自身の担当科目 1 科目を選択し、「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」について、実施方法・工夫・課題等の記入及び提出を求めた。

２．授業紹介の実施状況

2 回の授業紹介は、教育学部教員から報告いただいた。報告件数は、前期 17 件、後期 9 件の合計 26 件である。今年度は新型コロナ感染者の増加が繰り返され、先生方はその都度授業方法を臨機応変に変更せざるを得ず、その対応等で忙殺されている中でのご報告であった。報告件数も、過去の最高値 30 件に迫る報告数であった。深謝したい。



３．授業紹介における記述

昨年度は、遠隔ライブ中心の授業形態であったが、今年度は「遠隔+対面」「対面のみ」という授業形態も増加した。以下、各授業の工夫した点などについて、前期回答の一部を抜粋し紹介する。なお、紙面の関係上紹介できなかった後期回答等については、教授会資料等を参照されたい。

(1) 授業準備

① 学生との打ち合わせ・アンケートの活用，manaba による資料の事前提供等

・事前に受講学生、未登録ながら有志受講の学生から、インスペクター、副インスペクター、パートリーダー、伴奏者を決定。第 1 回よりすぐに歌唱実技に入れるよう準備。また附属中音楽科と連携し、学習成果発表の機会として訪問してミニコンサートを行うために、講義開始前から複数回打ち合わせを行った。

・この授業では、学習指導案に関する課題を課していますが、昨年度の受講生に対する授業アンケートの意見をもとに、学習指導案の提出に関するサイクルを見直し、それにともなって前期の授業計画全体の微修正を行いました。本年度の受講生の意見をみると、結果として、この見直しはよかったように感じています。

・マナバのニュースを用い、毎回授業形態（対面，遠隔）のアナウンスと課題（小テスト）の紹介を行い、受講生が迷わないように注意した。また授業で使う資料をコースコンテンツに載せ、紙媒体としても準備し、どちらにも対応できるようにした。

・授業の前日ないしは前々日に、manaba に配付資料を掲示した。児童生徒をめぐる状況や対応の仕方について具体的に考えられるよう、仮想事例を作成してそれを検討できるようにした。

・実技に関する授業において、導入として最終目標となる制作物を見せることによって、受講生が目標をはっきり持てるよう工夫をした。その制作物について、作品例のバリエーションをもたせることで、工夫次第では無限に自己を表現できることを意識させた。

② 授業方法（遠隔，対面）を考慮した授業準備

・教室前の廊下でたむろすることがないよう、できる限り早めに教室をあけるようこころがけた。

・事前に指導案や実践を配り、読んできた上で授業分析を共有するという形を取る予定であったが、30 名全員が読んできている状態ではなかったため、授業の中でも 15 分程度時間を設けた。学習意欲に応じた対応をすることによって、多くの学生が議論に参加できたと考えられる。

・遠隔も 3 年目となり、準備はそんなに時間はかからなったが、対面なのか、遠隔なのかが始まるまで気になった。学生も対面派と遠隔派に分かれてきているように感じ、授業方法を変更すると賛否の意見が寄せられた。

(2) 授業運営

① 授業運営上の工夫

・遠隔授業では休憩をはさみ、学生が過度に長時間集中する状況を避けるようにした。

・各回の授業時の初めに、受講生 1 名が食物、あるいは食生活全般の中から自身が興味ある点について調べ、それをパワーポイントにまとめ発表する時間を 5～10 分設定した。質疑応答や意見を発表する中から、自身の興味が食物学の広範な学習内容につながることをよく理解してさらに興味を拡げていくことができたのではないかと考える。授業は、自身で取り組む課題を学習場面と繋げて進めて行くように設定し，最終回で発表させた。

・今期は学校現場とのつながりを意識して授業運営を行った。より具体的には附属幼稚園、小学校のこどもたちを授業に招きともに活動を行った。その際、学生たちにはその活動の説明などをこどもたちに向けて行わせた。そうすることによって、指導方法や教材づくりについて実際的な場面に即して学習させることを意図した。またそうしたクラス外とのつながりや反応が学習の励みになっている様子がみられた。

② 学生の反応を活かす授業

・成形手順に関する動画を作成して最初に見せることで、受講生が見通しを立てやすくなるよう工夫をした。実制作のなかで、個々の問題点が出てくることから、机間巡視を多くすることで対応した。

・Zoom を用いた授業であったが、受講者どうして学び合う機会としてのグループ討議を多く持ちたいと考えたため、毎コマ、必ず次のことを行った。①アイスブレーキング、②班ごとに進行役と副進行役の設定、③先述の①と②を一体化した自己紹介、④討議すべき内容を明確化、⑤討議した結果を manaba に班ごとにアウトプット、⑥先述の⑤の内容を全体で共有・ふりかえり、⑦討議時間は１班４人組で 15〜20 分間（テーマが１つならば、このくらいが集中して話し合いやすい；４人組くらいが注意力の持続と意見の多様性のバランスがとれる印象あり）の設定、⑧ブレイクアウトルームに切り替える前に受講者のビデオをＯＮにするよう指示してから､ブレイクアウトルームを開始する、⑨ブレイクアウトルームの各ルームを巡回して適宜サポート、⑩グループ討議そのものについて意見・感想があれば次の授業でとりあげる段取り、等を行った。

・学びを深めるため、必ず毎コマ、ふりかえり（リフレクション）を記入させて、次のコマの冒頭で、そのいくつかを抜粋して（Ａ４判で１〜２枚分）紹介した。なるべく多様な意見をとりあげるように留意した。

(3) 成績評価

① manaba の活用

・小テストを 40%評価，確認試験を 60%評価とした。小テストはマナバの自動採点システムを用い，評価の負担軽減ができた。

・授業後のレポート作成を 3 回、授業参観シートを 1 回、指導案作成（略案）を 3 回、振り返りシート１回の提出物と毎回 2〜3 回程度のレスポンによるアンケート調査を基礎点に、１５回目に確認試験をして、総合的に判断している。秀の人数制限が出てきてから、学生の違いを厳密にすることに苦労しているが、manaba によるコメント等を利用して、一人一人のよさをこれからも評価できるようにしていきたい。

② 評価方法の工夫

・ミニッツ・ペーパーと筆記試験で評価。レポートは授業の理解度を測れないのと内容のばらつきが大きく評価しにくいため，論述問題 3 問程度の筆記試験で評価している。問題は主に学生に自分の言葉で分かりやすく授業内容を説明させるものであり，授業内容を総合的に学生がどれだけ理解し消化しているかを評価している。

・学習指導案の作成を行わせる授業において、同じ指導案を３回にわたって提出させた。提出の度に紙面及び対面での指導を個別に行い、改善と修正を行わせた。

(4) 授業時間外学習の支援

① 支援の工夫

・オフィスアワー、授業前後の質疑応答を実施した。受講者全体の役に立つ質問は授業中にアナウンスした。

・講義内容の復習の参考になるよう講義終了後、manaba に講義ノートを提示した。受講生は確認テストの直前にはチェックしたようである。

・ペースが遅い学生も授業時間外に手を動かせるよう実習室を開放した。その際、常に見本を教卓へ置いておくことで、自由に手に取って確認し、受講生の目標意識を保てるようにした。また、成形手順の動画を manaba へ載せておくことで、受講生がいつでも予習・復習できるようにした。

・レポートとして課した問題には解答を配った。質問のある学生には個人的に対応した。

② 今後の課題

・家庭科は学んだことの実践が大切です。そのため、授業の最初に前時に学んだことについて「この 1 週間で考えたり実践したこと」について、zoom のコメント機能で全員に書かせ、全員で即時共有しています。私の感覚としては、40 人以上の授業では、zoom のほうが教育的効果が高い気がしますし（全員に意見を書いてもらい共有することができるため)、私もやりやすいです。ただ、確実に寝ている人もいると思いますが、対面でもそれは同じかと思います。コロナが終息し対面でするときも、スマホから zoom に入らせて（コンピューターの音声オフで)、チャットに意見等を書かせたいです。

・対面で実施しているときは、講義終了後に必ず質問してくる学生がいたが、遠隔になってから少なくなった。チャイムがなるまで授業していることも原因の一つであるので、後期は５分ぐらいの質問タイムを確保して終了できるようにしていきたい。授業日の３限を研究室待機で質問を受け付けるようにしているが、前期は介護体験の配慮願いの提出の学生が数名いただけであった。学内をもっと出歩いて気軽に声掛けするように努力したが、このコロナ禍ではそれも自粛するしかない。

・前期末の manaba による授業アンケートとともに，前期の途中でも，アンケート（無記名）を実施し，前期後半の授業の実施方法等の改善に受講生の意見をできる限り反映するように努めました。

・授業について振り返る機会を設けていただき、ありがとうございました。すべての科教育の授業で、模擬授業をされていると思うので、大学祭のイベントあたりで模擬授業のパフォーマンス大会でも出来たらいいなと思いますが、そんな企画、ありでしょうか。

4. まとめ

「授業紹介」の形式により、教員相互の情報交換を実施した。上記に掲載した内容等は、冒頭に示した FD の目的を十分に達成するものであり、授業改善を図る上で参考になるものばかりであった。

そして、何よりも各教員が厳しい状況下でも、学生のために様々な工夫を凝らしているという事実を共有できたことが大きい。今後も、状況に応じた情報交換を継続したい。

３章　教育学部学生 FD 委員会の活動

１．学生 FD 委員会の活動概要

学生 FD 委員会は、本学部の授業や教育の改善を目的として FD 活動を担う学生主体の組織であり、各領域・学科２名の委員から構成されている。FD 委員会の具体的な活動として、全国学生 FD サミットへの参加や学部シンポジウムの企画・実施、学生交流イベントの運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度の FD 委員会は、新型コロナウィルスの影響により全国学生 FD サミットが中止となったものの、感染対策を強化することによって交流イベントを３年ぶりに開催することができた。

２．活動と振り返り

（1）学生交流イベント

これまで履修登録や学生生活は対面で相談し話を聞く場が多かったが、新型コロナウィルスの影響により学年を超えて気軽に話せる場がない状況にあった。そこで、学年と学科を超えた交流を促進することで、人と人とのつながりを深めることを目的に、学生交流イベントを企画・実施した。11 月 23 日（水・祝）12 時から、学科対抗ソフトバレー大会を開催した。参加人数は 154 名となり、学生 FD 委員が換気や消毒、検温など感染対策を行い、無事に終えることができた。参加者からは、「仲を深めることができた」、「毎年開催してほしい」という声が寄せられた。

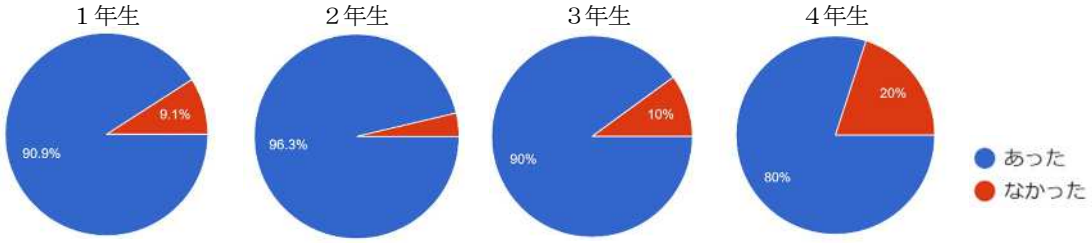
（2）FD シンポジウム

新型コロナウィルスの影響が続くなか、以前のような授業形態へと戻ってきた今年度は、12 月 13 日(火)16 時 10 分から学生 FD 委員が主催した「コロナ禍を経ての私たちのつながりと関わり」と題した FD シンポジウムを開催した。学生 FD 委員自身が入学時からコロナ禍であり、人と人とのつながりの難しさを体験した学年である。そのなかで、大学生活や入試、実習等がどのような状況であるのか把握するため、在学生にアンケートを実施し、その結果をもとに教育学部各委員会の委員長をはじめ、学部教員と学生が意見交換を行った。以下は、アンケートの抜粋である。

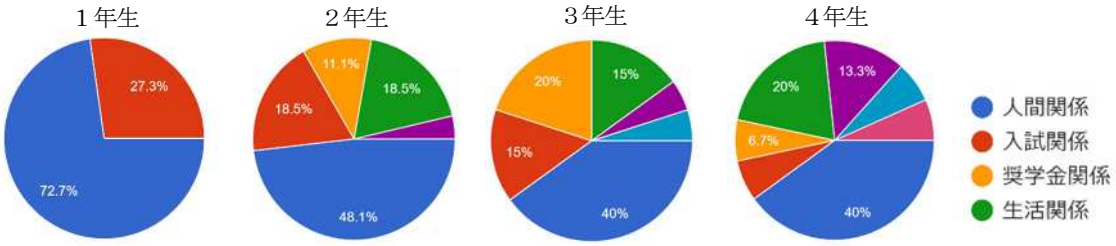
【 学生FD委員会アンケートについての報告 】

回答者：74名（1年生11名，2年生27名，3年生20名，4年生15名，編入生1名）

1．大学に入る前（高校時代など）に不安なことはありましたか



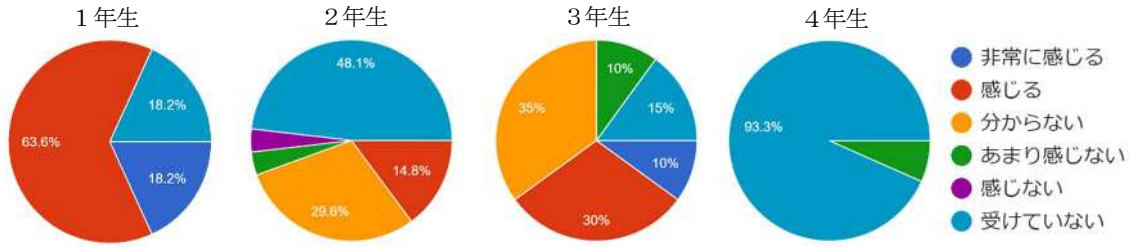
2．どのような不安がありましたか



3．可能な範囲で，その内容を教えてください（任意回答）

コロナ禍で対面が少ない中友達ができるのか／ちゃんと馴染めるか／入試内容／朝起きられるか／知らない人が多い環境でコミュニケーションをとることができるか／浪人生だったため／大学にかかる費用が高く生活が苦しくなりそうで不安だった／合格できるかどうか／合格できるか／受かるかどうか／時間がつくれるかどうか／履修登録／合格できるかどうか／知り合いがいないため、大学のことで分からないことがあっても相談できないこと／友達ができるか、仲良くやっていけるか／コロナの影響により対面する機会が少なかったため人間関係の構築が不安だった／自分で時間割を組むこと／県外からきたので友人ができるか不安だった／県外からきたので関係を作れるかなどが不安だった／ご飯の準備／奨学金を返済できるか／バイトや食費のこと

4．前期試験を受けた方で2次試験の集団討論に関して，必要性を感じますか



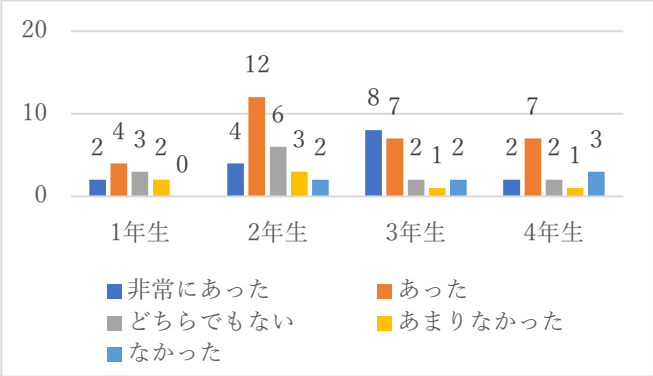
5．上記に関して，その理由を教えてください（任意回答）

大学に入ってからは論文を書いたり社会問題について考える機会が多くあるから／筆記試験とはまた違った能力を使うから／教員は人との対話が特に出来るべきだとおもう。それが出来るかどうかの確認は必要だと思う／就職にも役立つから／自分の自信のなかった回答が他の人の回答に繋がり想像していたより話が広がった。孤独な面接よりあの場でしか引き出せないものはあると感じた／周囲の会話を聞き自分の意見を分かりやすいように伝える能力を測れるから／まとまりがなく自己主張しかしなかった／教育に対して向き合う心構えができているかを見極める重要な機会であるため／緊張するが自分の意見を持っているかがよくわかるから／記述試験だけで測れる内容でその人の能力は測れないから

8. 入学後の同級生や先輩とのかかわりについて不安がありましたか

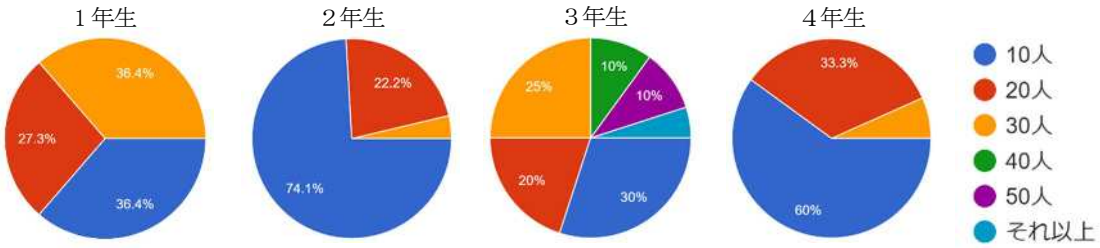
9. どのようなことに不安がありましたか

（任意回答）

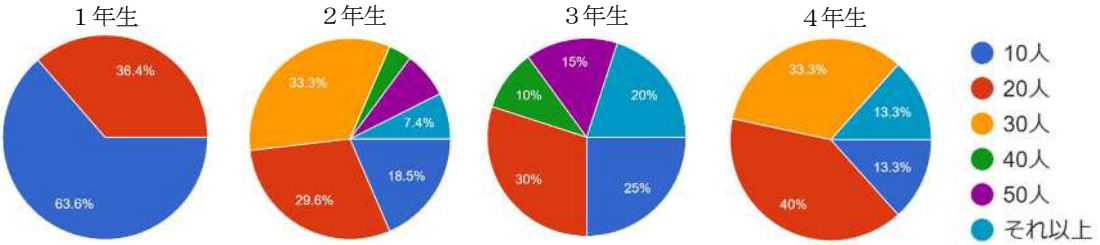


遠隔授業が多いと思っていたので同級生や先輩と仲良くなれないのではないかと不安だった／コロナ禍で友人ができるのかどうか／仲良くなれるか／コロナ禍で対面がほとんどなく関わりを深める機会が少なかったこと／否定的な人はいないか／コロナの影響により対面する機会が少なかったため人間関係の構築が不安だった／色々サポートしてもらえるか／先輩との関わり方がわからなかった／話題の有無／友達ができるか／なんでも話せるような友達が出来るかの不安

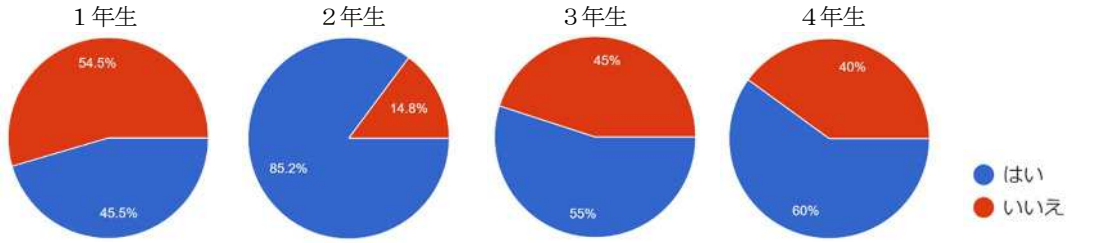
10. 入学前，友人や知り合いは何人くらいできると想定していましたか（教育学部内）



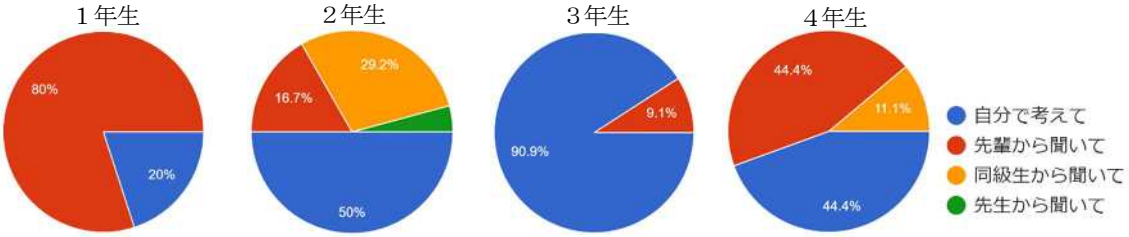
11. 実際，入学してから今日までどのくらいの友人や知り合いができましたか（教育学部内）



12. 現在，複数免許科目を履修していますか



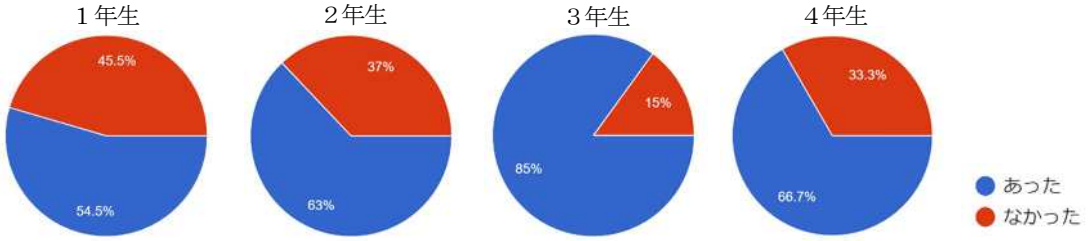
13. はいと答えた方は，履修の仕方はどのように知りましたか



14. 現在，履修の仕方に関して不安なことはありますか（任意回答）

必修科目の見方が分かりづらい／どこで知ればいいか、何から始めればいいか、本当にあっているかいつも不安で同級生や先輩に確認している。自分できちんと把握できるようにしたい／第2種免許を取得する際の単位の取得方法が分からないです／取り忘れがないか／時間が被っている講義があり単位がとりきれるか不安／選択必修科目を取り切れるのか／複数免許を早い段階から取りたいが同じ時間に複数の必須教科がかぶって時間割を組むのに苦労する／必修単位が取りきれるかどうか／単位を全て取り切れるか／特支を 2 年後期か 3 年から目指したかった(特支の実習後に興味を持ったため)／履修科目が重なりすぎていて受けられない

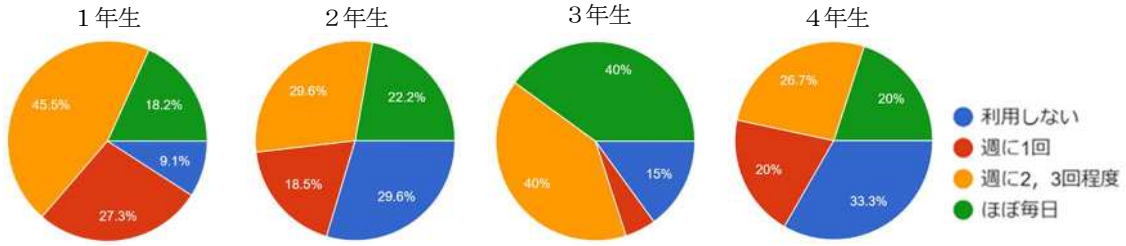
15. 人数制限科目に関して不満に思うことがありましたか



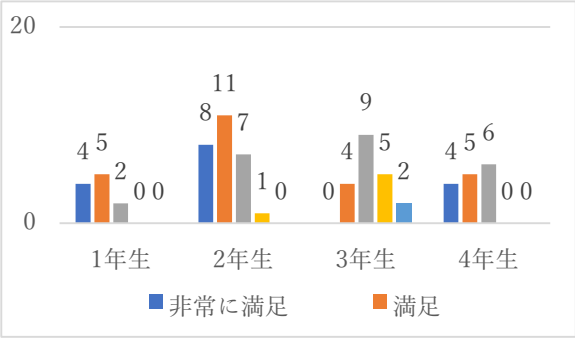
16. どのようなことに不満がありましたか（任意回答）

友達はほぼ落ちていなかったのに私だけ前期も後期も 2、3 科目落ちた／自分の学びたいことが学べない／受かるか／同じ学年の人と受けれないことがある／優先度が高く設定されているはずなのに抽選落ちしている場合があること／先に登録が必要なことが 1 年の後期は分かっていなかった／落選するとその後の計画が崩れたり不安が大きい／抽選に受かるかどうか／必修であるのに抽選で落ちること／高学年になっても抽選に受からないこと／仲の良い友達と履修が被らないこと／毎回抽選から漏れるため予定通りに免許取得が行いにくい／4年生から抽選通るため 4 年まで小学校専門科目をとれないこと／取りたい免許がたくさんあるのに制限があると大変だった／卒業要件である小学校免許取得が危ぶまれる点／焦る／受けさせてほしい／みんなが平等に受けたい／説明不足を感じるからもっとわかりやすくアナウンスしてほしい／必修科目が人数制限に当たっている／抽選に落ちてしまい自分の計画していた通りに履修できなかったこと／学年が上がっても人数制限科目に抽選が当選することが難しいこと／必修科目なのに人数制限をされると受講できるかどうか不安になる／4年になるまで卒業に必要な単位を取得できないこと／優先順位。小学校免許は必修でも抽選が多く中等コースは外れて取得免許を再考しがち。特に小学校免許の必修授業は同じ授業を初等向けと中等向けで 2 つ設定すべき／抽選があるせいで履修計画が狂った。必須科目なのに抽選でなかなかとれず4年まで持ち越したものもあった／履修登録期間をもう少し長くして欲しい／抽選科目を提出する時に再提出できるようにしてほしい／低学年のうちから取りたいのに人数制限のため抽選漏れした／抽選で落とされ 4 年になるまで履修できなかったこと／学年が上の人たちが優先なので履修に時間がかかった

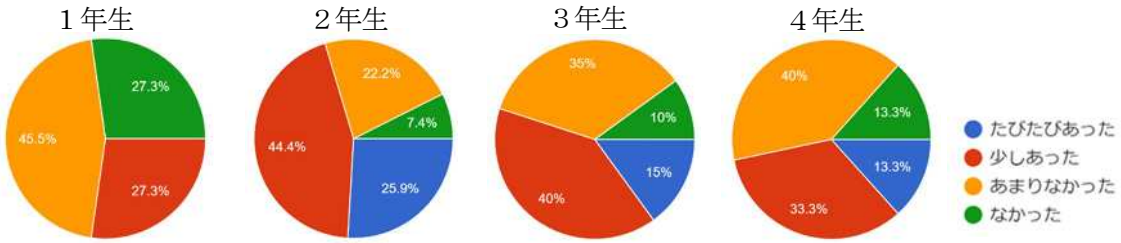
17. 学部内の施設の授業外の利用頻度はどのくらいですか（AL, 理系棟，文系棟，講義室，体育館，駐車場等）



18. 施設の利用時間に満足していますか



20. これまで実習等で不満な点はありましたか



21. たびたびあったという方にお聞きします。その理由はなんで何でしたか（任意回答）

どの学校によってでる移動距離の差に不満を抱えている同級生はたくさんいる。集合時間に間に合わないバスしかなくタクシーを呼んで数人でお金を割って出勤したこともあった／交通費が自費。附属だったら交通費かからないのに。また、附属だったら複式も見れていいなと思う／実習校によってかかる費用が異なること。特に交通費／荷物が多い／ほとんどの時間をジャージで過ごすのにも関わらず登下校はスーツでないといけないこと。移動のときにスーツだと少し不便なので／時期。通勤方法／第二免許の実習場所によってお金や労力の負担が変わること／実習地が通勤する所から１番近いところでないということ、実習費用が学費に含まれていないこと

（３）ピアサポート

昨年度作成した新入生対象の履修支援冊子『履修登録のすすめ』を次年度の教育課程に合わせて修正し、より分かりやすい内容へと改善した。また、新入生だけでなく２年生以上も相談できる窓口を、学生が気軽にアクセスできる LINE アプリを使って開設し、各学科の FD 委員が実習や履修に関する質問を受け付けられるような体制を整えた。

３．今年度の成果と今後の課題

新型コロナウィルスによる行動制限が緩和されてきた今年度は、FD 委員会活動を少しずつコロナ禍以前の状態に戻すことができた。在学生の多くは入学時からすでにコロナ禍であり、学生交流イベントや FD シンポジウムでいかに人とのつながりが希薄であったのかを実感した。シンポジウムでは、学生側に立つことで初めて知る問題点も多くあり、より良い学習環境づくりのために教職員と学生双方が工夫し努力しなければならないことがまだ多くあることがわかった。また、学生 FD 委員会の在り方については、昨年度から課題であった学生が主体的に取り組むための活動方法をさらに考えていかなければならないという課題が残る。学生 FD 委員会がどのような活動を行っているのか、在学生や教職員、大学全体へ広報し、学生 FD 委員会活動の見える化を一層推進することが問題解決の糸口になるのかもしれない。

４章　令和４年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会

2022 年 9 月 29 日、岐阜大学の長谷川哲也准教授を講師にむかえ、FD 講演会を開催した。概要は以下の通りである。

テ ー マ：「教職志望者のキャリア形成と教員養成が果たす役割」について考える
講 演 者：岐阜大学 教育学部 学校教育講座 准教授 長谷川哲也
開催日時：2022 年 9 月 29 日（木）13 時 30 分～15 時 30 分
会　　場：教育学部第 1 講義棟 103 教室
出 席 者：19 名（教育学部教員 13 名、附属学校園 1 名、教育学部事務職員 5 名）

本講演会では、長谷川先生から「教職志望者のキャリア形成と教員養成が果たす役割」を講演タイトルにお話をいただいた後、参加者のそれぞれの学科や自身の専門分野での教育において大切にしていること、それぞれの学科・分野で学生がどのように歩みを進めているかについて、交流を行った。

長谷川先生の講演では、最初に、教員就職の現状と課題について各種調査結果に基づいた話があり、教員採用試験受験者数が大幅に減っている現在の状況について確認がなされた。その中でも、小学校、九州地方は倍率が厳しいことが紹介された。続いて、教職に向かう進路意識・進路行動として、小学校 6 年生、中学校 3 年生、高校 3 年生時点でどういった職業を希望しているかを対象とした調査結果に基づき、小学校 6 年生はあこがれなどの夢見型の職業志望であるが、中学校 3 年生、高校 3 年生になると、急に教員志望が出てくることが紹介された。このように、現実的に職業を意識する段階になってくると、教員という希望職業が現れてくることが、他の調査でも確認されていることが紹介された。また、保護者が自分の子どもに希望する職業の中にも教員が上位に現れていることが確認された。

子どもが抱く教職イメージと実際に教員が抱いている教職イメージについては、「責任が重い仕事」「世の中のためになる仕事」「子どものためになる仕事」など、両者で共通しているものがある一方で、子どもたちの 6〜7 割が抱いている「みんなから尊敬される仕事」というイメージについて教員は 3 割程度と差があること、「人気がある仕事」についても、子どもたちの 4〜6 割に対して教員は 1〜2 割と差があることなどが報告された。総じて、教職に対するネガティブなイメージには両者で差があまりみられないが、ポジティブなイメージに差がある（子どもたちのイメージの方が高い）実態が調査結果から確認できることが報告された。

また別の調査からは、保護者や子どもが抱いている教職イメージには「柔らかい」教職イメージ（ざっくりとしていて素朴なイメージ）と称することのできるような認知構造があり、そのようなイメージを有した教職志望者らが大学に入学してきているということは、押さえておく必要のある重要な知見であるのではないかと語られた。そのような実態に即してどのように教職志望者と向き合っていくか、教員養成を具体化していくかの検討が必要となるからである。

実際に教職に就いた者を対象とした「教員就職を心に決めた時期と要因」に関する調査では、小・中学生といった義務教育段階で教員就職を心に決めたと回答している者が 40%程度であり、大学時代の後半がもう一つのトレンドであることが紹介された。そして、教職を心に決めた一番の要因について、小・中・高時代の教師の影響が 50%超と圧倒的に多く、「よい先生（恩師）」との出会いが教職志望を決定づけていることが確認された。一方で、大学入学時点では教職志望でなかったが教職に就いた者や、入学時点では教職志望だったが他の職業を選択した者についての調査から、もともともっていた「柔らかい」教職イメージが大学進学以降に塗り替えられている可能性があることも紹介された。

そのような実態を確認した上で、教職イメージを形成する 3 つのフェーズとして「柔らかい」教職イメージ、「弾力ある」教職イメージ、「堅固な」教職イメージでとらえていく試論的なモデルが提案され、そのイメージ形成に大学がどのように関わるかについての提案がなされた。

特に、「弾力ある」教職イメージを形成する段階では、「教師観」から「教職観」へと転換させるために、いかに学術的・実践的概念を獲得してもらうかが必要となり、学校現場での実践的な学びとともに、既存の「教師観」を揺さぶり、人生・教職キャリアを見通した「教職観」を形成するための学びが必要と考えられることが説明された。そこでは、教職を神聖化し過ぎないこと、教科の本質を子どもに伝える役割、教育と社会との関係を意識する、自らの人生を豊かに過ごすことなどがキーとなってくるとされた。言い換えれば、自身の人生や家庭をかえりみずに「子どものために尽くす」という「献身的な教師像」ではなく、ライフ・ワークバランスの重視や自身の人生も豊かにしていくことと一体化した職業として教職をイメージしていくことのできる学生・教職志望者を育てていくことの重要性が指摘された。

また、子どもたちの有している「柔らかい」教職イメージや「献身的な教師像」は、現職教員がそのようなイメージを有しており、そのような働き方を子どもたちに見せていることによって獲得されている側面もあるため、現職教員が有している教職イメージ変容のための手立てや取組も重要となってくることが指摘され、講演のまとめとされた。

続いて、今年度の FD 講演会では、講演内容に対する質疑応答ではなく、講師と参加者、参加者間での交流の機会を重視した。日頃同じ学部で教員養成に携わっていても、なかなかお互い実践上大切にしていることや各分野での学生の歩みについて交流する機会をもつことが難しいからである。講演後には長谷川先生と参加者、そして参加者間での率直な意見交流を行った。

そこでは、最初に、教職志望者が大学教員から受け取っている影響について意見交流を行い、心に決めた一番の要因は小・中・高の恩師であるかもしれないが、大学教員も様々な影響を与えていると考えられることが確認された。

また、学生はいろいろな経験や学びを求めており、それに応える学習機会を鹿児島大学教育学部としては提供していく取組を進めてきたこと、実際、学生がそれらの機会に多く集まってきていることなども交流された。学生は「自分は本当に教職にむいているか（適性があるか）を確かめたい」と思っており、それを学生自身が確かめることのできるさまざまな学習・体験機会を学部としては提供していくことが重要だということが確認された。

一方で、現在の教員養成改革は、「しっかりと教員にしていく」「教職志望者が入学時点から変わらず卒業時に教職を選択する」ためのカリキュラムや教育実習への改革、教員採用試験受験率や就職率の向上を要請している側面があり、学生が自分の適性と向き合い、本当に教師になるのかどうかを自分で判断する力を身につける（その結果、時には他の職業を選択する）ことのできるプロセスを重視することとの齟齬が生じる側面を有しているとの発言も出された。たとえば、教員としての適性を自分で試す場としての学習・実習の充実ではなく、教員として必要な力量を「順調に」身につけるための学習・実習の体系化などが進められがちであるが、それが本当によい教員を育てることになるのか、また、本人にとってよい職業選択となるのかについては大きな疑問があることが指摘された。

なお、本学の教育実習に関しては、実習先の附属学校園においても学生が自分の適性を試す場としての意味を重視しており、同時に、教職の魅力を実感してもらうことを難しいが大切にしているということが意見交流の中で共有された。

また、教職・教員の仕事の中核は授業であることから、大学の教員養成においても、各教科の専門性や授業づくりについての学習機会は非常に重要であることが話題となったと同時に、教育実習において求められている学習内容や指導内容が、担当する大学教員の専門性と異なったり、各学問分野の専門的知見と異なっていたりする場合の指導の難しさや大学教員側の悩みについても交流された。

他にも、教員養成学部において実務家教員が果たす役割の重要性や、専門分野の削減縮小の問題、教職に就くことが難しいと思われる学生に対してどのように関わるのかといった問題があることについても確認・共有がなされた。

このたびの講演と意見交流を通して、目的養成としての教員養成を担う中で、鹿児島大学教育学部として、そこに携わる様々な専門性を有した大学教員が何を軸として共有し、一方でそれぞれの専門性をどのように重視して教員養成に携わっていくことが教員志望学生にとって価値のある学習を提供することにつながっていくのかを具体的に考えるための重要な論点を見出すことができたと思われる。このような機会がより身近に、柔軟に設けられ、教員間での交流と議論が充実していくことで、鹿児島大学教育学部で学ぶ学生が享受できる学習機会の本質的な充実へとつながっていくと思われる。

５章　授業改善セミナー

１．開催の趣旨

教育学部は2020（令和２）年に一課程に改組し、初等教育、中等教育、特別支援教育を軸に教員養成の充実を図ってきました。また教育学研究科は2021（令和３）年に教職大学院へと移行する形で改組し、こちらも教員養成及び現職教育に注力してきました。どちらも当然のことですが附属学校園での教育実習を重視したカリキュラムとなっています。特にこの３年間のコロナ禍にあっては附属学校園なしには実習の場を確保することもむずかしい状況でした。

こうして学部と教職大学院と附属学校園は連携協力を前提とした関係にあるわけですが、それにもかかわらず、これら三者の関係者が一堂に会して意見交換をする場がありませんでした。

そこでこのたび教育改善委員会の主催で本セミナーを計画したところです。教育実習をテーマとして取り上げることで、三者間にどのような連携の場があるのかをあらためて確認することができますし、教育実習生である学生の教育のことを含めて検討していける点で、教育改善のテーマとして最適であると考えたからです。

２．セミナーの概要

・日時　2023（令和５）年２月２２日（水）13:00-14:30
・会場　教育学部第一講義棟１０１教室

・開会の挨拶（上谷順三郎 教育改善委員会委員長・司会）
・来年度以降の改革構想（有倉巳幸 学部長）
・教育実習に関する話題提供（日吉 武 副学部長）
・カリキュラムに関する話題提供（松井智彰 副学部長）
・意見交換
・閉会の挨拶（土田 理 教育実践総合センター長）

（１）来年度以降の改革構想（有倉巳幸 学部長）

当日の資料「教育学部・教職大学院・附属学校園改革構想（案）―強みを活かした教員養成カリキュラムとフィールドとしての附属学校園構想―」（～８頁）の概要は以下の通りです。

１）教員養成段階の課題
２）教員採用・研修段階の課題
３）答申「『令和の日本型学校教育』を担う教員の養成・採用・研修等の在り方について」への対応
（教育学部・教職大学院・附属学校園改革構想）
①教員養成大学・学部、教職大学院の高度化・機能強化
②学部と教職大学院・附属学校園との連携・接続の強化・実質化
③教育委員会と大学との連携強化の促進

④教員養成に係る理論と実践の往還を重視した人材育成の好循環の実現
⑤教員就職率の向上
⑥組織体制の維持・見直し

（有倉学部長）

（２）教育実習に関する話題提供（日吉 武 副学部長）

①（学部長の）改革構想について教育実習担当からの意見
・実習関連活動の現状
・教育実習で教職志望度の向上があるのは事実。
・附属特別支援学校での学校体験は理想的ではある。
・外部人材として部活動指導に当たること、小規模校でのインターンシップ、幼稚園実習終了者のインターンシップの単位化はできないか。

②学部、附属学校園、教職大学院への要望等
・教師としてのやりがいの事例発信の充実
・幼稚園、特別支援免許取得を可能とするための教育実習期間の連携した設定
・１年次、各学校体験実習後の学生へのフォローの必要性

（日吉副学部長）

（松井副学部長）

（３）カリキュラムに関する話題提供（松井智彰 副学部長）

①改革構想について教務担当からの意見

・附属学校園１２年間一環教育の教育理念の提示
　これに伴う学部 CP・DP とカリキュラムの見直し
　（複数免許を推奨するカリキュラム）
・学部授業と「教育実習」の内容をつなぐ工夫
・教科教育と教科専門の教員による共同授業科目の開設
・教職履修カルテの有効活用（指導の実質化）
　ディプロマ・サプリメントと連動

②学部、附属学校園、教職大学院への要望等

・附属学校園間で連携した取り組みの実践
　教育実践の指導・研究ができる教員の配置
・教職大学院実務家教員による仲介
・各学校園で教科専門との関連を確認する機会の提供
・４年間通した学部学生への支援体制の構築

（４）意見交換等

　参加者による質問と学部長による回答を紹介します。

①小・中学校を見通した教員養成の連携・一貫教育に関する改革の進捗状況について

　カリキュラムの連動や幼小中で一つの教育目標達成を目指すことを求めていくつもりであること、幼稚園の３年保育一本化や小学校の一学級児童数の削減、インクルーシブ教育構想について３月の文科省事前相談に臨む予定であること、などについて説明がありました。

②かごしま教員育成指標改訂を契機とした今後の改革展望について

（あわせて、今回のセミナーのような意見交換の場を定期的に設けること、記録して着実に進めることの要望も出されました。）

かごしま教員育成指標の改定版をもとに19の資質を見直し、開講科目の整備やモデルカリキュラム化を進め、大学のディプロマ・サプリメントとの連動を図っていくこと、また学生へのサポート体制を見直し強化していくこと等の説明がありました。

③実務家教員の教員養成とのかかわり方の具体化について

教職大学院と教育学部のカリキュラム・科目の連携を図ること、学部生に教職大学院の授業（学生主体のディスカッション中心の授業）参観の機会を設けること、働き方改革と並行して附属学校園の先生方の学部授業へのかかわり方を検討すること、等の説明がありました。

最後に土田理教育実践総合センター長からご挨拶をいただきました。

初等教育コース独自の卒論指導体制づくりや「教員養成に関するアンケート」の分析の必要性を指摘していらっしゃいました。また、教職大学院での学びを参考に実のあるものを持たせるための授業を工夫し、学部生が４年間ここにいて良かったと思える学部づくりを目指すこと、そして教職大学院、附属学校園と学部が一体となって鹿児島の教育が目指すべきものを考えていくことなど、多くのご提言をいただきました。

（土田教育実践総合センター長）

編集後記

昨年度から始めた「授業改善セミナー」を含め、昨年度と同じ活動計画を立てて今年度の活動を始めましたが、今年度もコロナ禍のために、「授業参観」は「授業紹介」になり、全国学生 FD サミットは開催されませんでした。しかしながら、取り組んだ活動それぞれにおいて成果が得られ、また次年度への課題が確認され、学部において、教育改善を図るための本委員会の役割がより明確になったのではないかと考えております。

課題の一つは、関係する委員会の連携で、全学の FD 委員会と教務委員会の業務内容の連携や学部内の教務委員会との情報共有など、組織的な面での改善が求められると思います。その改善によって、より効率的な調査や分析が可能となり、教員や学生へより多くの成果を還元できるのではないかと思います。また、授業アンケートや授業参観・紹介の考察の仕方とその還元の仕方についての検討は次年度の中心的な課題です。そして、教職大学院と教育学部の連携による教育改善がこれまで課題となっていましたが、令和５年度からは共同で「ベストティーチャー賞」の選考を行う予定で準備を進めています。（上谷）

今年度から教育改善委員として、授業アンケートの実施と集計を担当しました。前任の先生が作成されたマニュアルとシステムが非常に便利で、集計作業に困難を覚えることはありませんでした。感謝いたします。また、徐々に対面授業に切り替わりつつある中で、アンケート回答率がどうなるだろうかと心配していたのですが、それほど大きく数字が悪化することもなく、例年並みの回答を集めることができました。周知してくださった先生方にも感謝申し上げます。次年度以降も、より多くの回答を集められるようご協力よろしくお願いします。（有家）

今年も教育改善委員会に参加させていただき，大変多くのことを学ばせて頂きました。担当させていただきました「授業紹介」では、ご多忙の中にも関わらず，多くの先生方から有益な情報を多数お寄せいただきました。本当にありがとうございました。

今年は，本委員会主催の行事に他の委員会の先生方も多く参加されました。例えば，授業改善セミナーには，学部長をはじめとして教務委員長や教育実践センター長，教職大学院，附属小中学校など，それぞれの立場からのご発言がありました。当初は戸惑いましたが，委員として係としての視点から考察することができ，新しい知見を得ることができたように思います。

私は本委員会を，２年間務めさせていただきましたので，今回で卒業になります。今後は，本委員会で得られた視点を生かして，with コロナの中でどのような授業方法が効果的なのか，考えていきたいと思います。ありがとうございました。（原田）

学生 FD 委員会を２年間担当させていただきました。今年度はようやくコロナ禍以前の授業形態に戻ってきた反面、コロナ禍で失ってしまったものへの慣れを感じる年でした。入学時にはすでにコロナ禍であり、人と接しないことが習慣化してしまった学生の、つながりたいのにつながれないという思いは、学生 FD 委員会主催のシンポジウムのなかにもよく表れていると思います。教育学部では、学生も FD 活動をしているということがなかなか周知されていないのが現状です。今後は、自分も一緒に活動してみたいと学生が思えるように、広報活動にも力を入れて学生 FD 委員会の活動を見える形にしていく必要があると感じています。（清水）

FD 委員 1 年目を務め、主に FD 講演会の企画を担当しました。大学の自律性、学問の自由という観点からだけでなく、学生本人の学習権や職業選択の自由、多様性の尊重といった観点からも、入学時点で教職志望度が高い者だけを集めた同質性の高い集団の中で、そのまま順調に学びを進められることに偏重したカリキュラム化や体系化を推進するような、現在の教員養成改革として求められ進められていることが必ずしもよい教員（本当に求められる専門性の素地を身につけた自律した教員志望者）を育てることにつながるとは限らない側面を有していることを、我々は教員養成に携わる専門家として自覚しておく必要があるとの思いを改めて強くしました。
また、今年度委員を務める中で、FD 活動の重要性は言うまでもありませんが、その活動内容が増えること自体が、日々の授業実践や教育の充実のための時間を奪っている側面にも我々は目を向けるべきだと感じました。「よい」と思われていることを「よいことだから」という理由だけで無批判に進めることが、多忙化の原因となり時に本質を見失わせる要因ともなっていることに、我々はもっと敏感である必要があると思う 1 年でした。関係のみなさまのご尽力に心より感謝申しあげます。（髙谷）